

2018年8月25日

# KJFC 例会

タイトル

## 『ルー・ドナルドソン特集』

～最後の生けるハードバップ・レジェンドに捧ぐ～

夏だ、祭りだ、ルー・ドナだ！

担当：紅 我蘭堂

### 【はじめに】

思えば私が好きな1950年代・60年代のハードバッパーたちはほとんど亡くなってしまった。例えばBLUE NOTEレコードの1500番台で演奏していたプレイヤーも絶滅したと言っても過言ではないだろう、……例によってよく調べていないけれど。あの、セシル・テイラーも今年鬼籍に入ってしまった。生存されているのは誰だろう？ ソニー・ロリンズとルー・ドナルドソンだろうか。

1926年11月1日生まれのルー。<sup>おんとし</sup>御年91歳で、いまだ現役続行。あまつさえ来日公演も企画しているという伝説{レジェンド}だ。大長老というべきルー・ドナに最大限の敬意を表したい。どうか100歳以上まで演奏し続けてほしいという願いもこめて今宵の進行を担当させていただく。

あらかじめお断りするが、今日は、一日ジャズ喫茶マスターの特権を活かして、かなり横着、横柄、横暴な進行をさせていただきます。LPレコードの曲順を尊重して連続して聴いていただくケースがあります。かなり乱暴ですが1曲1曲を分断して聴いていただくより、そのアルバム制作意図を多少ご理解いただけるかと思えます。たとえ貴方がオルガンとかコンガの音を、お好きでなかったとしても…。それに、このテキストではノー書きをダラダラと書きます。私なりのルー・ドナルドソン論(?)と受け止めていただければ幸いですし、単に読み流していただければオーケーです。

そしてさらにお断りするが、本日の私は、かの、ご高名な万年ノーベル文学賞候補作家様に正面切って喧嘩を売ります。万年さんはルーのことを堂々と“知恵遅れのルー・ドナルドソン”と書き残してくれた。このテキストの最後にその部分を付記しましたので、まあ読んでください。私がこれまで読み聞きしたジャズに関する評論および感想文、ライナー・ノーツその他もろもろの中で最低最悪なものです。何と独断と偏見、無知・無学、無能・無恥、不遜・傲岸に溢れた文章であろうか。面白おかしく読ませたいにしても、あまりにも創造性が欠如しているし、仮にもいつかはジャズ喫茶を経営していたと噂される人にしては稚拙すぎる。小説家の端くれなら、書いた文章には、きちっと責任を取ってもらいたい。品位・品格の欠片かけらもない。そのレコードの主演を持ち上げるライナー・ノーツなればこそ、もっと真面目・真剣に取り組んでほしかった。きっとノーベル文学賞の審査員も彼の本質を見据えているため

に、何年たっても受賞させないのであろう。万年は100万年たっても万年だ。

“知恵遅れ”……ルーは曲がりなりにもノースカロライナ州立農工大学出身。差別ではないが大学出のジャズメンは、当時としては稀有な存在ではなかったのではないか？

本日は、本当に“知恵遅れのルー・ドナルドソン”かどうか聴いていただき、善良なるKJFC会員の方にご判断していただきたい。それにしてもフィル・ウッズ以下のアルト奏者に対しても、礼を失っている駄文だ。

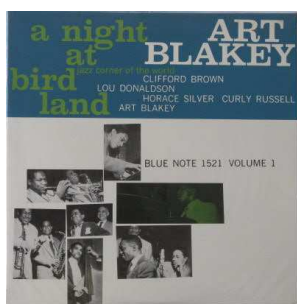
### 【第1期 BLUE NOTE 時代】1952年4月～1963年2月

富士山と桜が嫌いで、どうしても肌合わないという日本人に会ったことがない。もちろん花見酒だけが好きな人を含めて。醤油であれ塩であれ味噌であれ、ラーメンが嫌いな日本人も少ない。同じ意味で、日本のジャズファンで BLUE NOTE レコードが嫌いだ、聴いたこともないという偏屈な人は絶滅危惧種。その BLUE NOTE レコードはオーナーでありプロデューサーであったアルフレッド・ライオンという人の個性が強く出たレコード会社であったけれど、その活動を支えた多くのジャズメンがいた。ホレス・シルバー、アート・ブレイキー、アイク・ケベック、デューク・ピアソン、ジミー・スミス、スリー・サウンズなどなど。ルー・ドナルドソンもその一人。この第1期には1952年4月のミルト・ジャクソンとのレコーディング (BLP-1509) から始まって1963年2月のジミー・スミスのレコーディング (BLP-4141) までリーダー・アルバムからサイドメンまで30枚近いレコードを残している。11年間で30枚・・・貢献度は低くないし、ライオンのお気に入りだったことが証明できる。“知恵遅れ”かどうかはともかく、世間で言ういい加減なアルト・サクソフレイヤーではない。

この時期はルーの1回目の黄金時代でしょう。今日の進行のために便宜上「第1期」から「第4期」と称しましたが、他意はないので気にしないでください。

この1950年台前半のルーはリーダー・アルバムでもサイドメンで吹き込んだアルバムでも冴え渡っています。個人的には、この第1期がルーのすべてではないかと感じています。その後、演奏スタイルに紆余曲折はあったにせよ、この時期の純粋なハードバップこそが半世紀にわたって活動できた根源です。

(青色の曲が、本日聴いていただきます曲です)



#### A NIGHT AT BIRDLAND VOL.1/ART BLAKEY(BLUE NOTE BLP- 1521)

LOU DONALDSON(as)、CLIFFORD BROWN(tp)、HORACE SILVER(p)、CURLY RUSSELL(b)、ART BLAKEY(ds) 1954年2月21日録音

SIDE 1) 1. **SPRIT KICK** 2. ONCE IN A WHILE 3. QUICKSILVER

SIDE 2) 1. A NIGHT IN TUNISIA 2. MAYREH

“LADIES AND GENTLEMEN、AS YOU KNOW… (紳士淑女の皆様、ご存じ、本日はこのバードランドにおいて特別な夜を迎えます。また BLUE NOTE レコードもレコーディングを行います…)” このVol.1は司会のピー・ウィー・マーケットのアナウンスで始まるが、この独特な話し方によってゾクゾクするような期待の高まりを常に感じてしまうのは、どうしてもでしょうね。

とにかく正規発売されたVOL.1とVOL.2の2枚と日本独自でリリースされたVOL.3は、いわゆる“名盤100選”的なガイド本に必ず掲載されます。だいたいのキャッチフレーズは、「輝かしいハードバップ時代の幕開け」「モダンジャズ宣言の一夜」などなどという種類でしょう。でもなあ、縄文時代と弥生時

代がたった一日で区切られた訳ではないしなあ。これまで積み重ねてきた経験が結実した音楽表現だったのだろう。

このクリフォード・ブラウンと五分に渡り合ったルー・ドナルドソンのフロントラインを構成した演奏は見事。



#### QUARTET、QUINTET、SEXTET(BLUE NOTE BLP-1537)

(SIDE 1:4,5 SIDE 2:2)

LOU DONALDSON(as), HORACE SILVER(p), GENE RAMEY(b), ARTHUR TAYLAR(ds) 1952年6月20日録音

(SIDE 1:1,2,3,6)

LOU DONALDSON(as), BLUE MITCHELL(tp), HORACE SILVER(p), PERCY HEATH(b), ART BLAKEY(ds) 1952年11月19日録音

(SIDE 2:1,3,4)

LOU DONALDSON(as), KENNY DORHAM(tp), MATTHEW GEE(tb), ELMO HOPE(p), PERCY HEATH(b), ART BLAKEY(ds) 1954年8月21日録音

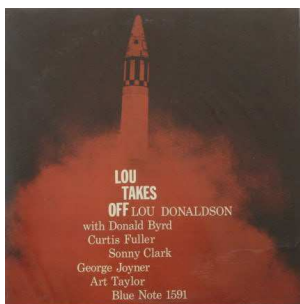
SIDE 1) 1. IF I LOVE AGAIN 2. DOWN HOME 3. **THE BEST THINGS IN LIFE ARE FREE**

4. **LOU'S BLUES** 5. **CHEEK TO CHEEK** 6. SWEET JUICE

SIDE 2) 1. THE STROLLER 2. ROCCUS 3. CARACAS 4. MOE'S BLUFF

さて、ルーの輝かしい初リーダー・アルバム。これは3曲続けて掛けます。こう言うては身も蓋も無いのですが、この3曲に1950年代におけるルーの魅力が凝縮されています。これを聴けばルーの魅力がご理解いただけると思います。私はルーのことを“金太郎飴”だと位置付けている。その根拠は、後に聴いていただく、約半世紀たったアルバムでの演奏との聴き比べです。概念というほど大げさなものでなくとも、ルーが演奏したい、表現したいと思っている音楽にブレはない。

わたくし事ですが、チャーリー・パーカーはほとんど理解できませんが、その弟子筋にあたるルーの演奏は、とても好きです。



#### LOU TAKES OFF(BLUE NOTE BLP-1591)

LOU DONALDSON(as), DONALD BIRD(tp), CURTIS FULLER(tb), SONNY CLARK(p), GEORGE JOYNER(b), ART TAYLOR(ds) 1957年12月15日録音

SIDE 1) 1. **SPUTNIK** 2. DEWEY SQUARE

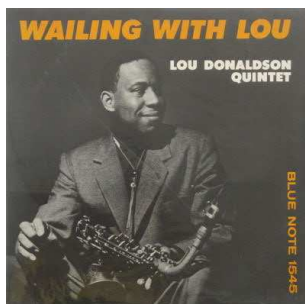
SIDE 2) 1. **STROLLIN' HIGH** 2. GROOVIN' HIGH

50年近くジャズを聴いてきて、もっとこの人たちの共演盤が聴きたい、こんな組み合わせのレコードが、もっと沢山あったらいいなあと感じるのがこのアルバム。1957年12月録音のこのレコードこそ、当時のハードバップを象徴している演奏だと思う。ハードバップのエッセンスが詰まったルーとソニー・クラークたちの快演を聴くことができる。躍動感と内容がこれまでのスイング・ジャズやビ・バップより格段に上がった感じだ。

正直に言って、チャーリー・パーカーは良いか悪いか理解できなかった。パーカーやディジー・ガレスピーたちのビ・バップジャズは演奏時間が短く、瞬間的で刹那的に感じる。ハードバップは演奏時間が長くなった分だけ密度が濃くなり、ミュージシャンの表現力が豊かになった気がする。このアルバムを聴いてジャズって何て格好いいんだろうと思った。ルーもソニー・クラークもカーティス・フラーもドナルド・バードも、みんな良いけれど特にベースのジョージ・ジョイナーが良いな。

ソニー・クラークの演奏も絶好調。何といてもあの大名盤「COOL STRUTIN'」(BLUE NOTE BLP-1588)の時期だから、悪いわけが無い。特に「STROLLIN' HIGH」はルーのオリジナル曲だけど、ソニー・クラークのリーダー演奏としか聴こえないのはどうしたものか。

互いに当時の BLUE NOTE の看板を背負っているようなルーとソニー・クラークだけど、存外に共演盤がない。恐らくこの1枚だけ。もったいない話だけど、逆説的に言えば、このアルバムを大事に聴いていきたい気持ちが強まる。



#### WAILING WITH LOU (BLUE NOTE BLP-1545)

LOU DONALDSON(as), DONALD BIRD(tp), HERMAN FOSTER(p). “PECK” MORRISON(b), ART TAYLOR(ds) 1955年1月27日録音

SIDE 1) 1. CARAVAN 2. OLD FOLKS 3. THAT GOOD OLD FEELING

SIDE 2) 1. MOVE IT 2. THERE IS NO GREATER LOVE 3. L. D. BLUES

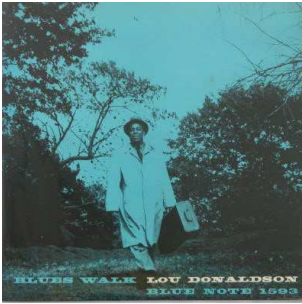
ルーがハーマン・フォスター(p)と相性が良かったのか、私にはよく分からない。でも相性がよかったということにしておきましょう。というかハーマンのどこがいいの？ あくまでも個人の感想ですが、私は“良い悪い”とは別に“好き嫌い”で判断すると、嫌いなほうです。このマシンガンのように鍵盤上を激しく上下する指使いは、時にはパチンコ台の大当たりのようにチンジャラジャラ・チンジャラジャラという感覚がして心地よさを感じる事もあるが、正直に言って私には、『油が濃すぎる』。アブラボウズというような脂ぎっている深海魚や、こってりラーメンに背あぶらを追加しているようなものです。たまに食べると「ウまい！！」と感ぜますが連日のように食べるのは、この年齢では無理です。蓼食う虫も好き好き ということでしょうか。ハーマン・フォスター(1928年4月26日～1999年4月3日)とは1953年から1981年まで少なくとも10枚は共演しているはず。ディスクグラフィーでは、このアルバムが最初の共演盤となっています。ハーマン・フォスターの後は、オルガンと組むことが多いルーです。よほどフィーリングが合っていたのでしょう。

#### [ルーに最適なピアニスト]

話しは横道に逸れますが、ではどのピアニストがルーにとって最良だったか私なりに想像してみました。私はレイ・ブライアントが最適だったと考えます。レイの程よい粘りっ気があるブルース感覚がルーには合っています。レイが駄目であればウイントン・ケリーとの共演盤はぜひ聴いてみたかったです。ウイントンの乗りのりピアノならルーも楽しく演奏できたはず。

レイもウイントンも BLUE NOTE レコードに録音していたので、何とかルーとの共演盤の機会がなかったものと、悔やまれます。蛇足ですがレッド・ガーランドは駄目。何度も繰り返して言いますが、レッドは致命的に一部のプレイヤーを除いてホーン奏者との共演が出来ませんでした。

私が当時のアルフレッド・ライオンだったと仮定します。ルーとレイの共演盤はぜひ制作します。ベースはポール・チェンバースよりダグ・ワトキンス。ドラムスは余計な手数を使わないデイブ・ベイリー。物足りないならジミー・コブではどうでしょうか。選曲はルーとレイのオリジナル曲中心に2, 3曲はスタンダードを入れましょう。きっとハードバップ好きな日本人ジャズファンに受ける好盤となったはずです。《閑話休題》



### BLUES WALK(BLUE NOTE BLP- 1593)

LOU DONALDSON(as), HERMAN FOSTER(p). “PECK” MORRISON(b), DAVE BAILEY(ds), RAY BARRETTO(conga) 1958年7月28日録音

SIDE 1) 1. **BLUES WALK** 2. MOVE 3. THE MASQUERADE  
IS OVER

SIDE 2) 1. PLAY RAY 2. AUTUMN NOCTURN 3. CALLIN' ALL

### CATS

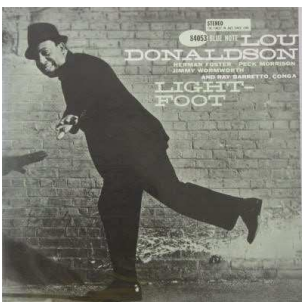
泣く子も黙り、訳の分からないノー書きを垂れ流している似非ジャズファンも失禁しながらひれ伏すという BLUE NOTE レコードの1500番台98枚。その中でも私はこのレコードをベスト10に入れます。私にとっては完成度が高いと思われるジャズレコードの1枚です。

この“BLUES WALK”という曲ですが、ルーにとってはとても印象的な曲だったようです。ブルーノート東京のホームページに掲載されているルーのインタビュー記事によれば、この曲と“ALLIGATOR BOGALOO”の2曲、さらにこれらが入っているアルバムはキャリアの中でベストの2枚と言いつけていますので、やはり掛けないわけにはいきません。

今回改めてルーのアルバム、特に BLUE NOTE 時代を聴きなおしてみても感じたのは、やはりアルフレッド・ライオンのプロデューサー力だと思いました。曲の配置・配分が巧みすぎて、どうあがいても1枚を通して聴いてしまいたくなる。ミディアムテンポからスローバラード、そしてアップテンポの組み合わせなど、絶妙の域を超脱している。このまま全曲を通して掛けたいくらいけど、それは許されまい。とにかくコンガのチャカチャカポンという音に惑わされずに、ルーの演奏を楽しんでいただければと念じます。

### [コンガ入りのジャズについて]

チャカポンポン、チャカチャカポンポンというコンガや打楽器を使った演奏は、我々日本人にとって好みに合うのでしょうか？ この時期、レイ・バレット達はかなり活躍して多くのレコードセッションに参加していました。特にその傾向は BLUE NOTE と PRESTIGE の両レコード会社に顕著だったようです。断定的な言い方は好きではないですが、どうもアフリカ系アメリカ人達は、こういう打楽器とオルガン音楽を好んでいたようです。ラテン系ミュージックの影響もあつたのでしょうか。ではコンガ入りをもう1曲お聴きください。この作曲者不詳の「MARY ANN」のような曲を吹きまくる軽快な乗りの良さはルーの独壇場。このノー天気な感覚には、もう理屈抜きに音楽に身をゆだねるしかない。



### LIGHT-FOOT(BLUE NOTE BLP-4053)

LOU DONALDSON(as), HERMAN FOSTER(p). “PECK” MORRISON(b), JIMMY WORMWORTH(ds), RAY BARRETTO(conga) 1958年12月14日録音

SIDE 1) 1. LIGHT-FOOT 2. HOG MAW(失敗テイク) 3. HOG MAW  
4. **MARY ANN**

SIDE 2) 1. GREEN EYES 2. WALKING BY THE RIVER 3. DAY DREAMS  
4. STELLA BY STARLIGHT





### LD+3(LOU DONALDSON WITH THE 3 SOUNDS) (BLUE NOTE 4012)

LOU DONALDSON(as), GENE HARRIS(p), ANDREW SINPKINS(b), BILL DOWTY(ds) 1959年2月18日録音

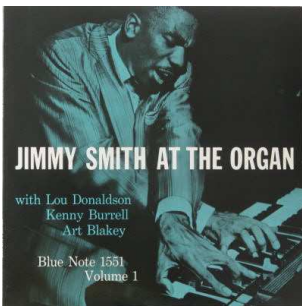
SIDE 1) 1. THREE LITTLE WORDS 2. SMOOTH GROOVE  
3. JUST FRIEND 4. BLUE MOON

SIDE 2) 1. JUMP UP 2. **DON'T TAKE YOUR LOVE FROM ME**

### 3. CONFIRMATION

BLUE NOTE レコードのオーナーでありプロデューサーだったアルフレッド・ライオンはピアノ・トリオのレコードを創る意欲を、あまり持ち合わせていなかった。それは極端な言い方としてもピアノ・トリオのレコードを創るならジミー・スミス達のオルガン・ジャズを制作・販売したかったし、またそれらのレコードが売れたのかもしれませんが。専属のピアニスト的存在だったホレス・シルバーやソニー・クラークなども確か1枚ずつしかトリオ・アルバムは制作していないはず。単に他のレコード会社と比べると、割合の問題かもしれません。ただし、そのような空気のなかで唯一の例外と言えるのが、このTHE THREE SOUNDSで、1958年9月に吹き込まれた『THE INTRODUCING THE THREE SOUNDS』(BST-1600)以降の怒涛のアルバム制作数は異常といえます。それこそ『殿、ご乱心』物。毎度、身びいきの仮説で申し訳ないですが、アルフレッド・ライオンという人はどうしてもレッド・ガーランドを意識していて、同等の雰囲気を持つレコードを創りたかったと、スリー・サウンズのレコードを聴くたびに思う。ただし、どうせピアノ・トリオのレコードを創るなら、我らBLUE NOTEならば、こう創る。と大見得を切って売り出したのが、このグループの位置付けだと確信しています。

そのスリー・サウンズとルーを組み合わせたのが、このアルバムです。お互いにこむずかしい理屈抜きに演奏するのが信条の連中が繰り広げる演奏に、しばし渡世のしがらみを忘れましょう。



### JIMMY SMITH AT THE ORGAN VOL. 1(BLUE NOTE BLP-1551)

JIMMY SMITH(org), LOU DONALDSON(as), KENNY BURRELL(g)、ART BLAKEY(ds) 1957年2月12日録音

SIDE 1) 1. **SUMMERTIME** 2. THERE'S A SMALL HOTEL

SIDE 2) 1. ALL DAY LONG 2. YARDBIRD SUITE

オルガン (ハモンド・オルガン) という楽器がレコードに入っていることでわが国のジャズファンの間では賛否両論があります。私はあまり気にしません。これは民族の好き嫌い、いや国民性の問題です。私たち日本人は欧米の人に対して「何で土足で家に上がるんだよ」と言いますし、反対に海外の人からは「どうして日本人は納豆なんて食べられんじやい」と言われます。そういうことなのです。お互いに理解し合い、その中で好き嫌いの選別をすればよいのです。“文化”が違うと断言してしまうと、身も蓋もなくなってしまいますが、お互いの文化を尊重することは大切なことです。否定してしまえば戦争になります。

さてルーの恐らく70枚ほどのLP、CDの中でオルガンとの共演が非常に多いです。そのうちジミー・スミスとは少なくとも11枚はアルバムを残しています (国内でのリリースを含む)。

この他に共演したオルガニストは、ベイビー・フェイス・ウィレット、ジョン・パットン、リロイド・メイヤーズ・ジュニア、ビリー・ガードナー、チャールス・アーランド、そして(ドクター)ロニー・スミス。この中でドクター・ロニー・スミスとは多くのアルバムを残しています。

ルーは、オルガンとの編成を好む理由として、わざわざベーシストが低音部をカバーしなくとも、低い音域はオルガン奏者がカバーしてくれると言っています。ベーシストのギャラをケチっている訳ではない。またベーシストのソロ・パートとかアドリブ演奏がうざったかった訳でもないでしょう。

いずれにしても、ルーのオルガン好きは徹底していて、1990年代に入るとバンドの編成はオルガン、ギター、ドラムスという組み合わせが基本になっている。その根底にあるのはもちろん 1950 年代のジミー・スミスとの共演アルバムなのは間違いない。またお気に入りのピアニストであったハーマン・フォスターに代わるピアニストが見つからないという理由も想像できます。見つからないならばいっそのことオルガンと組んだ方がしっくりするわい、とでも感じているのでしょう。

このアルバムはジミー・スミスとの共演盤でも珍しくワンホーン物。「SUMMERTIME」におけるルーの《むせび泣き》は聴き物。またケニー・バレル作曲の「ALL DAY LONG」も本当は掛けたかった。この《黒っぼさ》は、クウ〜たまらんわい!!

## 【第 2 期 ARGO (CADET) 時代】1963 年～1967 年

1963 年になって、ルーはブルーノートからシカゴにある CADET (ARGO) に移籍します。傍目(はため)で見れば疑問符だらけの移籍です。理由は何ぼでも推測できます。

- ・ CADET が移籍金を高額に積み上げた。
- ・ ジミー・スミスとのアルバムばかり創るアルフレッド・ライオンとの衝突があった。
- ・ 僚友ハーマン・フォスター(p)がアーゴの所属だった。などなどです。

まあ憶測だけで止めておきましょう。

この第 2 期では、ルーがややジャズロック風アルバムの制作を始めだしたとは言えるでしょう。ただしズズチャチャ、ズズチャチャといういわゆるロックビート風のリズムでも、ルーはテンションの高い、舞い上がった吹き方はしていません。あくまでも 4 ビートの正統派的な演奏です。世の中がフュージョンだ、ジャズロックだ、フリージャズだと変化している時代に流されないで、ブレないスタイルです。



### MUSTY RUSTY (ARGO 759)

LOU DONALDSON (as), GRANT GREEN(g), BILL HARDMAN(tp), BILLY GARDNER(org), BEN DIXON(ds) 1965 年 6 月 3 日録音

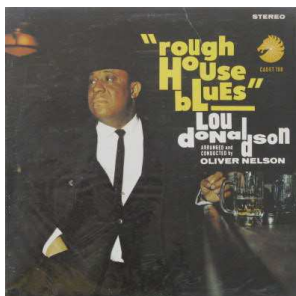
SIDE 1) 1. MUSTY RUSTY 2. MIDNIGHT SUN 3. HIPTY HOP

SIDE 2) 1. THE SPACE WALK 2. HA' MERCY 3. CHERRY PINK AND APPLE BLOSSOM WHITE

話しは若干横道にそれます。今でも、ピアノとオルガンのビリー・ガードナーをレッド・ガーランドの変名だと信じています。この当時はレコード会社との契約の関係で、変名でレコーディングしたケースが多かったと聞いています。レッド・ガーランドの本名は WILLIAM・GARLAND。WILLIAM の愛称は BILLY が多かったそうです。GARDNER と GARLAND。何となく雰囲気に近いような気がしませんか。演奏も、左手も使い方が酷似しています。ということで、ただそれだけの理由で BILLY GARDNER が入っているレコードを探しています。余談ですが私も変名を使おうかな。「くれない・がらんどう」をもじって、ク

レナール・ガランディエヌなんてどうでしょう。なんとなく《おフランス》っぽくないでしょうか、シェ〜。(閑話休題)

今聴いていただいている、この「ピンクの桜と白いリンゴの花」なんて曲は、なんで選曲したかいまだに理解不能だし、一步間違うと街頭広告宣伝隊の演奏のようにも聴ける。でもこのようなポピュラー曲を真面目な顔して直立不動でマイクに向かっているルーの姿を想像するだけで、微笑ましい。



### ROUGH HOUSE BLUES(CADET 768)

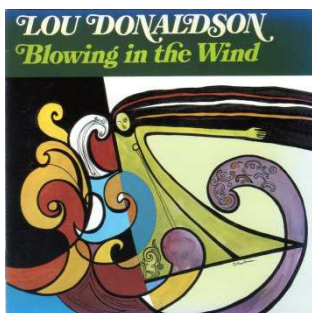
LOU DONALDSON(as), ROBERT ASHTON(ts), DANNY BANK(bs), PHIL WOODS(as), DAVE BURNS(tp), ERNIE ROYAL(tp), LLOYD G. MAYERS,Jr. (org), RICHARD DAVIS(b), GRADY TATE(ds), OLIVER NELSON(arrange)

1964年12月録音

SIDE 1) 1. TIPPIN' IN 2. L. D. BLUES 3. DAYS OF WINE AND ROSES  
4. IGNANT OIL

SIDE 2) 1. **ROUGH HOUSE BLUES** 2. BACK TALK  
3. HUFFIN' 'N' PUFFIN'

ルーが CADET (CHESS または ARGO、いったいどの名称が本当なのか?) に移籍して、最大の収穫はこのアルバム。何と BLUE NOTE 時代には考えられなかったミニ・ブラスバンドをバックにしてアレンジ・ジャズを吹き込んでいます。しかもアレンジャーはオリバー・ネルソン。お金をかけたアルバム創りをしてもらったようです。フィル・ウッズたちを従えて本当に気持ちよさげに吹きまくっています。本音をゲロしますと私の大好きなトランペッター、デイブ・バーンズがかなりのスペースで演奏しているのも、取り上げた理由です。



### BLOWING IN THE WIND(CADET 789)

LOU DONALDSON (as), HERMAN FOSTER(p), SAM JONES(b), LEO MORRIS(ds), RICHARD LANDRAM(conga) 1966年8月録音

1. **BLOWING IN THE WIND** 2. **WHO CAN I TURN TO** 3. **THE WHELER—DEALER** 4. PASSING ZONE 5. RELAXING IN BLUE 6. HERMAN'S MAMBO

ちょっと堅苦しいジャズファンに言わせると、ジャズメンがいわゆるポピュラー音楽やロックの曲をカバーして演奏すると、すぐに「売れ線狙いだ」「商業主義だ」なかには「墮落している」などと勘違いもはなはだしく<sup>けな</sup>貶すファンがいる。間違っている。多くの理由で間違っている。

1点目はジャズメンもレコード会社も“食っていかなければ”ならない。そのためには当然レコードが売れなければならない。カスミを食べて生きているわけではない。だから受けて売れるレコードを創ることは正しい。この世に500枚しかレコードを出さない会社やジャズメンはよほど裕福なのか偏屈だろうし、そんなレコードを有難がって買い求めるのはレコード蒐集を切手のコレクションなんかと混同している愚かなコレクターだけ。

2点目は、ジャズという音楽は眉間に縦縞を刻みながら、難解なオリジナル曲を演奏するばかりが知恵ではない。むしろポピュラー曲やミュージカルの楽曲などを消化しながら発展してきた音楽であり、所詮ジャズと言う音楽は他のジャンルの音楽と共存していかなければならない音楽という点を置き去り



にはいけない。例えばマイルス・デイビスは『ポギーとベス』というミュージカル作品を堂々のジャズにした。ジョン・コルトレーンは、あろうことか彼の容貌と似ても似つかない『サウンド・オブ・ミュージック』から、あの不朽の名演である『MY FAVORITE THINGS』を紡ぎだした。やはりミュージカル『メリー・ポピンズ』から『チム・チム・チェリー』を残した。シェリー・マンは『マイ・フェア・レディ』をピアノ・トリオの名盤にした。『枯葉』という曲は、ほとんどのジャズメンが好きだろうし名演奏も多いが、元歌はフランスのシャンソン。

長くなりましたが、ここでルーがフォーク・シンガーでありノーベル文学賞受賞者であるボブ・デュランの『風に吹かれて』を大真面目に演奏していても、大目に見てください、ということです。

この3曲でルーの特徴がご理解いただけると思います。1曲目はご存じボブ・デュランの名曲を、あつけらかんと演奏してしまうのがルーの真骨頂。また2曲目の感情が深く込められたバラード。3曲目はルーのオリジナル曲と称しているものの、ビートルズのジョン・レノンで有名な『スタンド・バイ・ミー』の、ほぼパクリと言える演奏など、リズム&ブルース的な乗りのよさに引き込まれてしまう。

### 【第3期 BLUE NOTE 時代】1967年～1974年

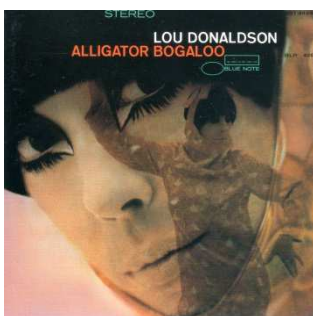
1966年5月 BLUE NOTE レコードのオーナーであり、数々の名盤を作成したアルフレッド・ライオンが、その子供のように大切にしていた会社を大手のリバティに10万ドルという金額で権利を売却し、そして1967年秋には、引退してしまいました。

そして、それと入れ替わるようにルーがブルーノートに復帰します。1963年にルーがCADETに移籍した時、アルフレッド・ライオンとルーとの不仲説をひとつの仮説とした私でした。でも浪花節と判官びいきがDNAに染み付いている日本人の私としては、この1967年初頭における移籍について「**ルー、ライオンの窮地に、おっとり刀で駆けつける**」説を提唱したいです。

ある日ルーにライオンから電話が掛かってきます。「親愛なるルー。僕は本当にレコード会社を続けていくことに疲れ果てたよ。君たちとレコードを作っていた10年前は本当に楽しかった。いい思い出だし、誇りに思う。もう本当に引退するつもりだ。何も口を出さない。でも子供のように慈しんでいたブルーノートの看板がなくなってしまうのだけが心残りだよ。ごめんよルー、ジジイの愚痴だ、忘れておくれ」。それに応えたルー・ドナ。「なに弱気なこと言ってるんだいボス。オイラに出来ることは何でもやってやるよ。今年でARGOとは契約が切れるから、ブルーノートに戻らせてくれよ。また昔みたいにどンドンレコード作ろうぜ。そうだ、明日契約書を送ってくれよ、それともオイラが事務所に行くわ」というような、やり取りがあってルーがブルーノートに復帰して、ライオンがほぼほぼ最後にプロデュースしたと思われるのが、1967年4月7日に録音された『ALLIGATOR BOGALOO』。

そしてこれが、結構売れたようです。ルーの、ライオンへの何よりの贈り物だったです。今日はこのアルバムを掛ける気はなかったのですが、長々と書いた手前、掛けます。

仕方ないです。だってアルバムに刻まれているプロデューサー名は、アルフレッド・ライオン！！



#### ALLIGATOR BOGALOO (BLUE NOTE BLP 4263)

LOU DONALDSON(as). MELVIN LASTIE(cornet), GEORGE BENSON(g), LONNIE SMITH(org), LEO MORRIS(ds) 1967年4月7日録音

1. ALLIGATOR BOGALOO 2. ONE CYLINDER 3. THE THANG 4. AW SHUCKS! 5. REV. MOSES 6. I WANT A LITTLE GIAL

第3期はこの1枚だけにします。繰り返しますが、ルーは「BLUES WARK」(BLUE NOTE 1593)とこのアルバムをキャリアの中でベストの2枚であると話しています。よく売れたらしいという理由だけで。

この時期、フジテレビで毎週土曜日午後到大橋巨泉と星加ルミ子が司会をしていた、確か『ビートポップス』という名の番組があった。小山ルミなんかミニスカで元祖お立ち台のようなステージでブイブイいわせていた。ビートルズやローリングストーンズまたはアメリカン・ポップスなどをベストテン形式で紹介している中で、このブーガルーが掛かっていたような記憶がある。そういえばこの番組で踊りの振り付けをしていたのは藤村俊二だった。ああ懐かしの1960年代よ。

#### 【第4期】1975年以降

ルーは、1967年から1974年までの第3期において、ブルーノート・レコードに13枚のアルバムを残します。しかし正直に言って、ほとんどが『ALLIGATOR BOGALOO』の延長線上であつたり、要するに第2第3のヒットを狙ったりするアルバムか、1970年代初頭を席卷したフュージョンっぽいものであります。何してんじやルー、という感じ。無責任な感想だけど、レコード会社やプロデューサーの思惑に煽られて、食べていくために無理くりレコードを創っている感じがする。そんなルーだけど1975年半ば頃からジャズを取り巻く情勢が変わってきた。世にいう『ハードバップ・リバイバル』の流れが来た。当時を簡単に振り返ると1970年代初頭にマイルス・デイビスが訳の分からないアルバムを創り、評論家なんかが大騒ぎしていた。チック・コリアはカモメさんのレコードで売れていたし、私は好きだったけれどウェザーリポートなんてグループも出現した。私なんか何も聴けばいいのかジャズ喫茶の片隅で悩んでいた。何にしてもジャズマンの服装が汚くなった。ビシッとスーツで決めてくれとはいわないけれど、ボロボロのTシャツにGパン姿はないだろうと幼心に思っていた(そういう自分はGパンで学校に通っていた)。

そんな時に日本のレコード会社がこぞって1950年代のレコードを再発し、さらに“エコノミック・アニマル”(こんな単語があつたなんて平成生まれの若い人たちは知らないだろうな)と全世界から異名をとった方々が、好景気の札東攻勢でアメリカから様々なプレイヤーを来日させた。とにかく来た来た。マイルスやチックなどの他に1950年代のレコード吹き込んでいたプレイヤーが、ごっそりと来日した。ざっと記憶にある時間差順不同でビル・エバンス、デューク・ジョーダン、アート・ファーマー、J.J.ジョンソン、カーティス・フラー、そしてアート・ペッパーetc, etc。アート・ブレイキーはジャズ・メッセンジャーズを率いて毎年来日していたのではないかと。新宿にあった厚生年金ホールや芝の郵便貯金ホールなんかでコンサートがあつた。またライブ・アンダー・ザ・スカイとかマウントフジとかオーレックスとかのジャズフェスティバルも盛り上がっていた。新しいレコード会社が日米で次々に立ち上がったのも影響しているだろう。こう言つては差しさわりがあるが、中には半ば引退しているようなプレイヤーも引きずり出された。レッド・ガーランドなんかも好例。想像するにニューヨークのクラブあたりでパァパァ吹いていたルーも駆り出されることになったのだろう。



#### FINE AND DANDY (Lob[Japan]LAF-1060)

LOU DONALDSON(as), RED GARLAND(p), JAMIL NASSER(b), JIMMY COBB(ds) 1980年2月6日録音

SIDE 1 1. STELLA BY STARLIGHT 2. THE BEST THINGS IN LIFE ARE FREE 3. MISTY

SIDE 2 1. FINE AND DANDY 2. BLUES 3. LOVERMAN 4. TENOR MADNESS

ルーは 1950 年代のブルーノート時代から、やはりブレていなかった。敢えてブルーノートの初リーダー・アルバムで掛けた「THE BEST THINGS IN LIFE ARE FREE」を比較するために掛けます。4 半世紀経ってもあまり変わったようには聴こえない。むしろ柔らかくなった感じがする。曲名紹介の最後に「IF YOU GATTA MONEY」(自由こそ人生で最高、あなたがお金を持っていればね) とジョークを飛ばすのもファンサービス精神豊かな人柄が出ている。

ルーとレッド・ガーランドの長いキャリアで、二人が共演したレコードはなかった。所属していたレコード会社が違いましたし、ガーランドが 2 度も雲隠れ的な引退状態になったためです。恐らくライブコンサートなどでも共演したことはないはず。何故か二人の音楽性は合っているように思えるのですが、若い時の共演アルバムがないというのは残念なことです。

以前にも書きましたが、ガーランドというピアニストは一部のプレイヤーを除いて、本当にホーン奏者とともに演奏することが不器用な人でした。と私は思っています。それがこの年になってルーとの共演アルバムを創ることになって良かったです。蛇足ですが、この時がルーの初来日でした。



### 'FORGOTTEN MAN' (TIMELESS SJP-153)

LOU DONALDSON(as), HERMAN FOSTER(p). GEOFF FULLER(b), VICTOR JONES(ds) 1981 年 7 月 2 日録音

SIDE A) 1. CONFIRMATION 2. WISKEY DRINKIN' WOMAN 3. THIS IS HAPPINESS 4. TRACY

SIDE B) 1. MELANCHOLY BABY 2. DON'T BLAME ME 3. EXACTLY LIKE YOU

おこがましいけれど、このアルバムを聴いてチャーリー・パーカーって人が少し分かる気がした。その昔、ジャズを聴き始めた頃に薄らいジャズ喫茶の片隅で、眉間に縦しわを刻みながら、全世界の憂鬱を一身に背負った声で「チャーリー・パーカーを理解できなければジャズは分からないのよ」なんて、お節介な人からヤニくさい息を吹きかけられながら、言われた。自慢じゃないが、パーカーなんて少しも理解できなかった詰まらない音楽だと思っていた。あのアルタネイト・テイクというのか別テイクというのか知らないが、同じ曲を何度も聴かされるレコード、あろうことか失敗演奏というのか中途半端に終わる演奏まで聴かされる苦痛で、嫌気がさした。

ルーのいいところは、そんな万年初心者の私をリラックスさせながら、パーカーの世界にズリズリと引きずり込んでしまうところ。オイラがパーカーの継承者だとばかりに、とにかく早く吹けばいいとばかりに気張って吹きまくる間抜けなプレイヤーより、よっぽど気が利いているし何より楽しいのが良い。それにしてもアルバム・タイトルを邦訳すると“忘れ去られた男”(?)となるのかな。悲しいなあ。

1980 年代から 90 年代にかけてルーは所属レコード会社を替えながらポツポツとアルバムを制作・発表します。このアルバム群を聴いてみると、ルーの音楽に対する方向性というか指向は新境地を開拓しようというのではなく、これまで積み上げてきたキャリアをもっと掘り下げる、あるいは充実させようという方向性です。「HARLEM NOCTURNE」であったり「WHISKEY DRINKIN' WOMAN」だったり、同じ曲を繰り返しながら、少しずつ変化させていこうということです。

ギターとドラムスのメンバーは流動的だが、オルガンのドクター・ロニー・スミスだけは固定しているのは、その証左だろう。



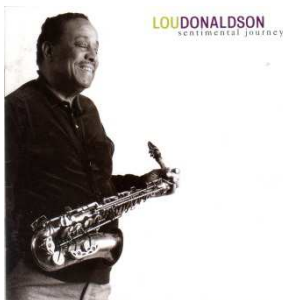
PLAY THE RIGHT THING(MILESTONE MCD-9190-2)

LOU DONALDSON (as), Dr.LONNIE SMITH(org), PETER BERNSTEIN(g),  
BERNARD PURDIE(ds), RALPH DORSEY(conga)

1990年12月19日20日録音

1. **PLAY THE RIGHT THING** 2. WHISKEY DRINKIN' WOMAN 3.  
MARMADUKE 4. HARLEM NOCTURNE 5. THIS IS HAPPINESS 6. I HAD  
THE CRAZIEST 7. THE MASQUERADE IS OVER 8. FOOT PATTIN' TIME

とはいえ、このアルバムタイトル曲は「若い衆よ、よく聴けよ。これが正しいバップだ」と50年代生き残りのハードバッパーの矜持を保った演奏だろう。



SENTIMENTAL JOURNEY(COLUMBIA CX-66790)

LOU DONALDSON (as), Dr.LONNIE SMITH(org), PETER BERNSTEIN(g),  
FUKUSHI TAINAKA(ds), RAY MANTILLA(conga,bongos \*only1,5,8) 1994年8月14

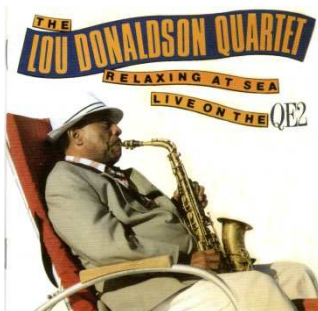
日15日録音

1. WHAT NOW MY LOVE 2. SENTIMENTAL JOURNEY 3. **WHAT'LL I TELL  
MY HEART**

4. MESSIN' AROUND WITH C.P. 5. MY LITTLE SUEDE SHOES 6. MIDNIGHT

CREEPER 7. DANNY BOY 8. PECK TIME

御年68歳の作品。この艶やかなアルトサックスのバラード演奏は、他に誰が出来る？ 私の浅い経験ではジョニー・ホッジスと五十嵐明要(あきとし)しかいない。



LIVE ON THE QE2 ~ RELAXING AT SEA (CHIAROSCURO RECORDS  
CDSOL-4542)

LOU DONALDSON(as), Dr.LONNIE SMITH(org), RANDY JOHNSTON(g), DANNY  
BURGER(ds), NICHOLAS PAYTON(tp \*only 8,9)

1999年11月5日6日8日11日録音

1. HARLEM NOCTURNE 2. MARMADUKE 3. WHISKEY DRINKIN' WOMAN 4.  
THE MIDNIGHT CREEPER 5. FAST AND FREAKY 6. AT WAS A DREAM  
7.CONFIRMATION 8. **NOW'S THE TIME** 9. I CAN'T GET STARTED WITH YOU 10. LOU 'S NEW YORK  
THESE SONG

公式に販売されているアルバムでは、一応最後のアルバム。豪華客船クイーン・エリザベス2世号で行われたライブの様式です。贅沢だよな。私もこういうライブを聴きに行きたい(IF I GATTA MANEY)。

御清聴ありがとうございました。

[ディスコグラフィ]

(リーダー・アルバム)

Quartet/Quintet/Sextet(Blue Note BLP-1537 1952年6月、11月。1954年8月録音)

Wailing with Lou(Blue Note BLP-1545 1955年1月27日録音)

Swing and Soul(Blue Note BLP-1566 1957年6月9日録音)

Lou Takes Off(Blue Note BLP-1591 1957年12月15日録音)

Blues Walk(Blue Note BLP-1593 1958年7月28日録音)

Light-Foot(Blue Note BLP-4053 1958年12月14日録音)

LD +The Three Sounds(Blue Note BLP-4012 1959年1月18日録音)

The Time is Right(Blue Note BLP-4025 1959年10月31日録音)

Sunny Side Up(Blue Note BLP-4036 1960年1月5日、28日録音)

Here 'Tis(Blue Note BLP-4066 1961年1月23日録音)

Gravy Train(Blue Note BLP-4079 1961年4月27日録音)

A Man with a Horn(Blue Note 21436 1961年9月25日、1963年6月7日録音)※1999年発売

The Natural Soul(Blue Note BLP-4108 1962年5月9日録音)

Mr. Shing-a-ling(Blue Note BST-84271 1962年8月27日録音)

Good Gracious!(Blue Note BLP-4125 1963年1月24日録音)

Signifyin'(Argo LP-724 1963年7月17日録音)

Possum Head(Argo LP-734 1964年録音)

Cole Slaw(Argo LP-747 1964年6月19日録音)

Rough House Blues(Cadet LP-768 1964年12月録音)

Musty Rusty(Cadet LP-759 1965年6月3日録音)

Blowing in the Wind(Cadet LP-789 1966年8月30日録音)



Fried Buzzard(CADET LP-842 1967年録音)

Lou Donaldson At His Best(CADET LPS-815 1966年8月30日録音)

Lush Life(Blue Note BST-84254 1967年1月20日録音)

Alligator Bogaloo(Blue Note 1967年4月7日録音)

Midnight Creeper(Blue Note BST-84280 1968年3月15日録音)

Say It Loud!(Blue Note BST-84299 1968年11月6日録音)

Hot Dog(Blue Note BST-84318 1969年4月25日録音)

Everything I Play is Funky(Blue Note BST-84337 1969年8月22日、1970年1月9日録音)

Midnight Sun(Blue Note LT-1028 1970年7月22日録音)

Pretty Things(Blue Note BST-84359 1970年1月9日、6月12日録音)

The Scorpion(Blue Note 1970年11月7日録音)

Cosmos(Blue Note BST-84370 1971年7月16日録音)

Sophisticated Lou(Blue Note BN-LA-024-F 1972年12月18日録音)

Sassy Soul Strut(Blue Note BN-LA-109-F 1973年4月17日、18日録音)

Sweet Lou(Blue Note BN-LA-259-G 1974年3月14日、19日録音)

Fine And Dandy(Lob[Japan]LAF-1060 1980年2月6日録音)

Sweet Poppa Lou(MUSE MR-5247 1981年1月7日録音)

'Forgotten Man' (TIMELESS SJP-153 1981年7月2日録音)

Back Street(MUSE MR-5292 1982年録音)

Live in Bologna(TIMELESS SJP-202 1984年1月録音)

Play the Right Thing(Milestone MCD-9190-2 1990年録音)

Birdseed(Milestone MCD-9198-2 1992年録音)

Caracas(Milestone MCD-9217-2 1993年7月録音)

Sentimental Journey(COLUMBIA CX-66790 1995 年録音)

Relaxing at Sea: Live on the QE2(CHIAROSCURO RECORDS CDSOL-4542 1999 年録音)

(サイドメンまたは共演盤)

Milt Jacksons/Milt Jackson (Blue Note BLP-1509 1952 年 4 月録音)

Genius of Modern Music Vol.2 /Thelonious Monk(Blue Note BLP-1511 1952 年 5 月録音)

Cliford Brown Memorial Album (Blue Note BLP-1526 1953 年 5 月録音)

Kenny Dorham Live 1953-1956-1964(Royal Jazz RJD-515 1953 年 8 月録音)

A Night at Birdland Vol. 1/Art Blakey (Blue Note 1954 年 2 月 21 日録音)

A Night at Birdland Vol. 2/Art Blakey (Blue Note 1954 年 2 月 21 日録音)

A Night at Birdland Vol. 3 /Art Blakey (Blue Note 1954 年 2 月 21 日録音)

Woofin & Tweetin' /Gene Amons All Stars (Prestige LP-7050 1955 年 6 月 15 日録音)

A Date with Jimmy Smith Vol.1/Jimmy Smith (Blue Note BLP-1547 1957 年 2 月 11 日録音)

A Date with Jimmy Smith Vol.2/Jimmy Smith (Blue Note BLP-1548 1957 年 2 月 11 日録音)

The Singles/Jimmy Smith(Blue Note BN45-1668 1957 年 2 月 12 日録音)

Jimmy Smith At The Organ Vol. 1(Blue Note BLP-1551 1957 年 2 月 12 日録音)

Jimmy Smith At The Organ Vol. 2(Blue Note BLP-1551 1957 年 2 月 12 日録音)

Jimmy Smith Trio + LD (Blue Note BLP-1610 1957 年 7 月 4 日録音)

House Party /Jimmy Smith (Blue Note BLP-4002 1957 年 7 月 4 日, 1958 年 2 月 25 日録音))

The Sermon ! /Jimmy Smith (Blue Note BLP-4011 1958 年 2 月 25 日録音)

Cool Blues /Jimmy Smith (Blue Note 1958 年 4 月 7 日録音)

Rockin' the Boat /Jimmy Smith (Blue Note BLP-4141 1963 年 2 月 7 日録音)

A Different Scene(Cotillion SD-9905 1976 年録音)

Color As A Way Of Life(Cotillion SD-9915 1977 年録音)

We Small Hours/Red Garland(Trio[Japan]PAP-9211 1980年2月5日録音)

Lessons In Living/Mose Allison(Musician E1-60237 1982年7月21日録音)

One Night With Blue Note Vol.3(Blue Note BT-85115 1985年2月22日録音)

[参考文献:ジャズ・ヒーローズ・データバンク(JICC 出版局 1991年発行)に掲載されたルー・ドナルドソンの項目を参考にさせていただき、私が追加修正補足を行いました]

---

(付記)

「チャーリー・パーカーは、死んで何を残したのか？」

(前略) さて、こういったカリスマ的家長が死んだあとに必ず起こるのが跡目争い、遺産争い、チャーリー・パーカーの場合も例外ではない。遠縁のオバサン連中は通夜の炊き出しをやりながら「こんなこと言っちゃなんだけど、チャーリーさんも、まあうまい時に死んじゃったわねえ」なんて気楽なこと言っているが、近親者はそれどころじゃない。

長兄フィル・ウッズは、仏さまの枕もとでしくしく泣いている若い義母をなんだか下心ありげに慰めているし、それを見ていきりたつ次男ジャッキー・マククリーンを、叔父のソニー・スティットがわけ知り顔でまあまあとなだめている。かと思えばチャーリーお父つつあんが新橋の芸者に生ませた隠し子キヤノンボールなんかは、我関せずとムシヤムシヤ鯨を苦ばかりで、まわりのヒンシュクを買っている。

こういう殺気立った場所に隣家の息子リー・コニッツがくやみに来たもんだから、これはたまらない。「お前は本当はチャーリーお父つつあんが隣のオバサンに生ませた子供じゃないのか？ そういえばいつぞやのお父つつあんのオバサンを見る目つきがおかしかった」なんて無茶苦茶な言いがかりをつけられることになる。コニッツは「ジョ、冗談じゃありませんよ、僕が目鼻立ちを見て下さい。ちっとも似てないじゃありませんか」と弁解に努めるのだけれども、「いや、そうムキになるところがかえって怪しい」ととりあってもらえない。

一方、控えの四畳半では末弟のソニー・クリスとチャールス・マクファーソンが知恵遅れのルー・ドナルドソンをあやしなげに、じっと唇を噛みしめ、「汚ねえ、みんな汚ねえ、お父つつあん、なんで死んじゃったんだい」などと言いつつあっている。(後略)

(村上春樹 1980年 ビクター音楽産業発売「UP、UP&AWAY/SONNY CRISS」のライナー・ノーツより一部を抜粋)

## 【後記】

KJFCの3代目会長である富田正敏は、とても不運な会長でした。例会を開催できる場所もオーディオセットも失い、簡易ポータブルプレーヤーを片手に例会の開催場所を求めて日本橋茅場町周辺をさまよい、ある時はあろうことか行きつけのスナックに持ち込んでターンテーブルからはみ出したLPレコードを掛けて涙することもありました。彼は日本橋茅場町に生を受け、向学心がありながら親の言いつけで「商店の息子が商業高校以上の教養を得る事はまかりならない」という江戸時代的な理不尽な理由で大学に進学できませんでした。高校卒業後はせつせと家業を手伝い、タウンエースを運転して商品の注文取りや納品に精を出しました。もうひとつ熱心だったのが吉原通い。相当遊んだらしいです。ただし落語の世界の若旦那と違うところは、お店のお金には一切手を付けていません。あくまでも自分が額に汗して稼いだお金で、遊んでいたようです。

確かに黙っていればテナー・サクスの松本英彦に似ているハンサムボーイだから、その世界ではもてたのでしょう。ただし残念なことに、しゃべると下ネタとジョークが多かったのですが。

その彼は、ブルーノートを中心とするハードバップ・ジャズが大好きで、ハンク・モブレイのアルバム・タイトルにちなんで、『ワークアウト T シャツ』なる物を作ってしまった。もっとも何枚売れたかは定かではありません。

今晚掛けたアート・ブレイキーの『AT BIRDLAND Vol.1』冒頭におけるピー・ウィー・マーケットのMCがことのほかお気に入り、懇切丁寧に訳してくれたのです。「我蘭堂ちゃん、分かる？『AS YOU KNOW・・・』ってのは『ご存じ・・・』って意味だよ」。そしてピー・ウィーの最後の言葉「サンキア〜」がことのほかお気に入り、ことあるごとに「サンキア〜」を連発する悪癖がありましたが、誰からもうるさがられたことがありません。

この富田さんが、あろうことか、なかりうことか50歳を過ぎてからアルトサクスを習うと高言したのです。小中学校の音楽で通信簿「2」以上もらったことがないという富田さんが、です。

案の上、教室に通っても、やれテンポが遅い、譜面が読めていない、リズム感が悪いなどなどプロの先生から散々でしたが、もう15年以上続けています。偉いです。年1回行われていた音楽院の成果発表会でもアドリブ演奏がしっかりしてきました。しっかりしてきたのは結構なのですが……。直近の成果発表会で先生から「何を演奏したい？」と問われて、何と『BONE & BARI/CURTIS FULLER』(BLUE NOTE BLP-1572)に収録されている「ALGONQUIN」を演奏したいと言い出したのです。

さあ弱ったのは先生。かのBLUE NOTE1500番台とはいえ、誰でもが知っているレコードではないし、有名な曲でもない。とんでもないリクエストをしたものです。バックで演奏してくれる人々に配る譜面もありはしない。ただ15年以上も通っている生徒である富田さんを大事にしてくれた音楽院は、上を下への大騒ぎ。結局、ありえない話ですが先生にレコードを聴かせて、採譜させてしまったのです。ヒイヒイ言いながら採譜した先生が「これは難曲だから、止めたほうがいいですよ」と懇切丁寧にアドバイスしてくれたのですが、根っからのBLUE NOTE人間になってしまった富田さんに通用するはずがありません。頑として首を縦に振りませんでした。演奏結果は語らないのが花でしょう。

何故、富田さんがアルトサクスを習い始めたかは分かりません。詮索するのは、それこそ大きなお世話でしょう。ただひとつだけ推測できるのは、BIRDLANDにおけるルーの演奏が、40年前からインプットされていることです。何か楽器を稽古したい＝大好きなBLUE NOTEレコード＝ルー・ドナルドソン＝アルトサクスという構図でしょうか。そういえば最近、<sup>くだん</sup>件の発表会後の笑顔がルーに似てきました。そう、まさしく『ファンキーおじさん』になってしまいました。ルー・ドナルドソンの影響力、恐るべし。